

明治元年(1868)8月長野県南安曇郡明盛村の医家に生まれた。20年東京農学校に入り、27年に帝國大学農科大学林学科を卒業した。直ちに大学院に入って樹木分類学を研究する傍ら山林局嘱託となり、30年に農商省技師となった。明治33~35年森林植物学研究のため仏、独、瑞各国に留学し、36年に林学博士の学位を得た。41才の若さで山林局林業試験所(後の林業試験場)長となり、以来昭和7年65才で退官するまで23年間その職にあった。

大柄な体で容貌はいかつかったが、緻密周到な計画立案及び長期的展望のできる能力と繊細な神経の持主で、近代科学癡癪期における研究者、指導者そして教育者として林学分野で多大の貢献をなした。研究態度は分析と総合を兼ね行い、その成果を実地に検証するものであった。まず基礎的な分野をかためる必要があると考えて樹木分類学の研究に努め、トガサワラ、オオバボダイジュなど多数の新樹種を発表した。特に山林局入局直後に着手し明治45年に刊行した日本森林樹木図譜2巻及び日本



竹類図譜は、本邦産主要樹木320種と竹類39種について生植物をもとに精密な彩色画と正確な記述を付した我が国初の大図鑑で、欧米の学者からも称賛を博した。

次いでクスノキの樟脳油生成(学位論文)、林木の陰陽性、銅塩類の植物に対する毒性、あるいは林木の種子産地、品種並びに遺伝性、苗木養成法などについても広範な研究を行い、後二者ではその成果を以て林業種苗法関連諸法令を制定せしめた。また邦産並びに外国産樹種の公園・街路樹としての養成法、植栽法あるいは枯死原因の究明等についても研究と指導に当たり、東京市や都市近郊の公園についての論述も、ものにしている。

長い林業試験場長在職中は、広い分野の研究者の指導育成に努め、氏の発案によって目黒の地に開設された同場をして林学の一大研究機関に育て上げた。この間明治33、43年には万国博覧会関連の日本委員として仏、英両国に出張し、大正7年には、樺太、シベリア及び満州北部の森林調査の指導監督の任を果たした。一方京都・東京両帝国大学の講師として、特に後者では林学第二講座担任として学生の教育指導に当たった。日本林学会長、日本農学会長あるいは興林会理事長としても斯界の発展に尽くし、昭和22年79才で世を去った。